

艱難期の二人の預言者 モーセとエリヤ

<https://ichthys.com/mail-Two-Witnesses-Moses-Elijah.htm>

からの抜粋翻訳

質問 #1:

次の箇所について説明していただけませんか。

「バプテスマのヨハネまで預言されていた、神の世界的な王国が地上に実際に樹立されること(その到来を最初に告げたのがバプテスマのヨハネです:[マタイ 11 章 12 節](#))」

私は、「神の世界的な王国が地上に実際に樹立されること」がバプテスマのヨハネまで預言されていたということ、そしてそのヨハネがその到来を最初に告げたということが理解できません。彼以前に預言されていたものを、どうして彼が最初に告げることができるのでしょうか。同様に、[マタイ 11 章 12 節](#)でイエスはなぜ「バプテスマのヨハネの日々から今に至るまで」と言われたのでしょうか。それは比較的短い期間のように思えます。最後に、この箇所について(ご覧のとおり、私はまだ十分理解できていません)、私の聖書にある注解では次のように説明されています。

天の御国は旧約の律法によって閉ざされているのではない。なぜなら、それは血統によって得られるものではなく、召命の恵みに応答する個人的な努力によって奪い取られるものだからである。

また別の解釈として、(もし私の理解が正しければ、)あなたが述べられたものに近い解釈もあり、それによると、この箇所は不信者による迫害について語っているとされています。しかし、その解釈でも一つ疑問があります。不信者がどのようにして天の御国を「襲う」ことができるのでしょうか。天の御国は定義上、彼らの手の届かないところにあるのではないのでしょうか。

また、「十字架以前の神のご計画に含まれていた戦いの防御的性質」という表現を使われましたが、なぜその戦いは防御的なものなのでしょう。説明していただければ幸いです(たくさん質問を一度にしてみました)。

返信 #1:

[マタイ 11 章 12 節](#)についてですが、私は「herald(告げる)」という言葉で、「その到来が差し迫っていることを告知する」という意味で用いています(王の到着を告げる先触

れが、王の直前に現れるのと同じです)。これに対して「預言する」は、「遠い将来に起こることを予告する」という意味で用いています。ヨハネもイエスも、「悔い改めよ。天の御国は近づいたからだ」と語りました([マタイ 3 章 2 節](#), [4 章 17 節](#))。つまり、御国はまさに実現しようとしていたのです。しかし、この到来しようとしていた御国の現実は、イエスの時代の人々によって拒絶されました。その結果、イエスの受肉以来常に存在してきた「御国到来の切迫性」は、いまだ実現されないままであり、キリストの再臨までその状態が続くこととなります。

主の初臨は、神のご計画の激化をもたらしました。それ以前の神の家族は、一つの血統の線のようなものであり(悪魔は常にその線を断ち切ろうとしていました)、メシヤの到来と教会の設立以前の神のご計画と信仰共同体は、おおむね「悪魔が忠実な者たちの系譜を滅ぼそうとし、神がその小さな共同体を守り続ける」という構図で要約できます。しかし、悪魔が神のご計画に対して最も大きな努力と資源を投入したのは、主の地上での働きの期間でした。なぜなら、彼にとってメシヤを妨害すること以上に重要なことはなかったからです。この悪しき者による激しい攻撃に対応するものとして、十字架後には神の家族の急速な拡大が起こります。そして、それこそがここでの主の言葉の背後にある意味です(たとえば [15 節<14 節>](#) でエリヤに言及されていることは、エリヤが告げる再臨時の御国到来へと視点を移しています)。主の到来、その働き、全世界のための死、復活、昇天、着座、そして聖霊とその賜物の派遣の後、神は「攻勢に転じられます」。それまでのように信仰共同体の系譜を守る防御的な段階ではなくなり、神の家族は人数の面でも、また啓示された真理の量の面でも幾何級数的に拡大し始めるのです。前者はサタンにとって重要な意味を持っています。なぜなら、彼とその配下の者たちは神の家族から排除され、その代わりに教会の信者たちが一人ずつ加えられているからです。十字架以前の進展速度では、その必要な数に到達することは不可能に見えたかもしれません。しかし今や、時が尽きる前にその数が満たされうるとは明白なのです。

あなたの聖書の注解についてですが、この箇所は解釈が非常に難しい箇所です。多くの預言に関する知識を必要とするうえに、多くの解釈者がここでギリシア語を誤解しているからです。私なら次のように訳します:

バプテスマのヨハネの日々から今に至るまで、神の御国は激しい攻撃を受け
ており、暴力的な者たちがそれに手をかけている。(マタイ 11 章 12 節)

要するに、この箇所は、主がご自身の時代の人々の期待と現実との対比を示すために語られたものだと私は考えています。彼らは、メシヤがただちに圧倒的な力で王

国を支配すると期待していました。しかし主はここで、王であるご自身(そしてその王国)が、まず悪しき者の攻撃を受けなければならないこと、そして私たちの身代わりとして苦しみを受けなければならないことを明らかにしておられるのです。それによって初めて、将来到来する王国の土台が据えられるのです。

御国への希望にあって、

ボブ・ルギンビル

質問 #2

<省略>

返信 #2

<前半 省略>

ヨハネとエリヤについては、下のリンクをご覧ください。しかし、ここでは要点だけを簡潔に述べておきます。

「まことにあなたがたに言う。ここに立っている者の中には、神の国(すなわち再臨)を見るまでは決して死を味わわない者がいる。」イエスがこれらのことを話してから八日ほどして、ペテロ、ヨハネ、ヤコブを連れて祈るために山に登られた。祈っておられるうちに、その御顔の様子が変わり、御衣は稲妻のように輝いた。すると見よ、二人の人、モーセとエリヤが栄光のうちに現れてイエスと語り合っていた。彼らは、イエスがエルサレムで成し遂げようとしておられたその去り行くことについて語っていた。(ルカ 9 章 27-31 節/NIV 訳)

この箇所が明らかにしているように、モーセとエリヤは、メシヤの栄光ある到来に先立って来るとマラキが預言した有名な「二人の証人」です(マラキ 4 章 4-6 節)。しかし、イエスの同時代人たちが理解していなかったのは、メシアには二度の到来があるということでした。すなわち、一度目は十字架において罪のために死ぬことによって世を罪から救うために来られ、二度目は栄光のうちに世界を統治するために来られるのです(第一ペテロ 1 章 10-12 節参照)。モーセとエリヤは、再臨に先立つ艱難期の中に再び生かされます(黙示録 11 章 1-14 節)。彼ら自身はイエスの初臨を直接告げたわけではありません。しかし実際には、モーセとエリヤはイエスとヨハネの対応する予型なのです。モーセはキリストの予型です(すなわち、律法における彼の多くの働きはキリストを表し、予表しています)。そしてエリヤはヨハネの予型です。したがって、モーセとエリヤ自身は初臨を告げたわけではありませんが、類型論的な意味ではエリヤである先触れがいました。すなわち、バプテスマのヨハネです。それゆえ、イエスがヨハネにつ

いて「彼こそ来たるべきエリヤである」と言われたのは、マラキの預言が初臨においてはその予型であるヨハネによって実質的に成就し、再臨に先立ってはエリヤ本人によって文字どおり成就することを意味しています。メシヤが到来したことを示す「しるし」の一つは、その先触れが先立つことでした。新約聖書は十分な証拠をもって、ヨハネこそその先触れであったと証言しています([マタイ 3 章 1-17 節](#)など)。ヨハネは人格的な意味でエリヤなのではありません。しかし、預言的・類型論的な意味ではエリヤなのです。彼は、実際のエリヤが再臨のために果たす役割を、初臨のために果たしたのです。このことについては、次のリンクでさらに詳しく読むことができます：

[艱難期の二人の証人: 黙示録 11 章 1-14 節 — モーセとエリヤ](#) (「来たる艱難期第 3 部 A」)

14 万 4 千人と二人の証人 ([The 144,000 and the Two Witnesses of the Tribulation](#) <英文>)

エノクではない ([Not Enoch](#) <英文>)

また注目すべきことに、ヨハネが斬首され、イエスが十字架につけられたように、その類型的対応者である二人の証人も獣によって殺されます ([黙示録 11 章 7-12 節](#)参照)。また、「彼こそ来たるべきエリヤである」というヨハネについての主の言葉は、変貌山の出来事と結びついた文脈の中で理解すべきものです。そこではペテロ、ヤコブ、ヨハネがモーセとエリヤを見ました。この二人の「証人」の出現は、再臨の際にメシヤの到来を告げる彼らの艱難期の奉仕を象徴しているのです。

いつもながら、あなたの親切な言葉に感謝します、私の友よ。私は毎日あなたのために祈り続けています。神があなたを霊的に前進させ続け、あの日に良い報いを受けられますように。

私たちの主イエスにあつて、

ボブ・ルギンビル